

アイヌの活動家

19 世紀後半以降、アイヌは土地から強制的に追われ、日本社会への同化を強いられる中で多くの苦難を経験しました。しかし、そのような状況下でも活動家たちは、アイヌの人々の言語、文化、土地のために闘う方法を見出してきました。

アイヌの権利のために闘う

新井源次郎（1901-1991）は旭川市出身の学者であり活動家でした。彼はまた、地方自治体で働いた最初のアイヌでもありました。1930 年代、彼は芸術家の砂澤ビッキ（1931-1989）の両親である砂澤ペラモンコロ（1897-1971）と砂澤トアカンノ（1893-1953）と共に東京へ赴き、アイヌの土地の返還を求めて抗議活動を行いました。生涯を通じて、新井は 1899 年の北海道旧土人保護法の廃止を求めて闘いました。この法律はアイヌを保護するという名目で制定されましたが、土地の没収と伝統文化の衰退を招きました。この法律は最終的に 1997 年に廃止されました。

言語と文化を保護する

織物芸術家の砂澤ペラモンコロは、アイヌの女性たちに裁縫や刺繍を教えることで彼女たちを支援しました。彼女は口承叙事詩と物語の知識を持つ人物として尊敬され、それらをアイヌ

研究者たちに伝えました。彼女と夫のトアカンノは、新井源次郎の著書『アイヌ伝記』で紹介されています。

門野ナンケ（1881-1963）と妻のハルエ（1887-1968）は、アイヌ語を話す最後の世代の上川アイヌの一人でした。門野ナンケは、祖父である村長のクチンコロ（1792-1867）から伝統的慣行および文化を受け継ぎました。クチンコロは 1869 年、政府高官に対して、旭川のアイヌを石狩川上流の先祖伝来の土地から移住させる計画を断念するよう説得したことで尊敬されています。